

芸術教育の評価

一真と贗一

柴田良貴

芸術学系教授

外部評価

本年度、芸術関係組織は初めての外部評価を行った。様々な評価を頂戴し、そのまとの作業を急いでいるところである。評価をお願いした方々は、彫刻家で一昨年、文化功労者として顕彰を受けられた中村晋也氏を委員長に、造形芸術の世界でそれぞれ第一線で活躍されている錚々たるメンバー八名であった。

このような方々の評価に晒され、芸術は大丈夫？との声もあったようである。今手元に委員の方々のコメントのコピーがある。本稿では、あくまで私個人の感想だが、各委員の方々の言が強く心に響いた部分を述べる事としたい。しかし、評価を受けながらも、一作家、一教官として決して変わる事のない信念のようなものを最後に述べる事にしたい。

心に響いた事

委員長のコメント：「私のように筑波大学に縁故のある者にとっては、もっと筑波大学ならではの気魄を教授していただけたらと思います。東京高師・東京文理大…から続く精神はどこへ消え去ったのかと思われ淋しく思いました。昔は、日本の教育は俺達が背負うという大きな大きな自負がありました。それが『桐の葉』です。」

筑波大学は高師・文理大・教育大のみが母体ではないが、伝統をもし消し去っているとすれば申し訳のない事だ。確かに教育者・画家・彫刻家・デザイナー・美術館館長等々、先輩方は全卒業・修了生の比率からみると、素晴らしい業績を残される方が多数いらっしゃる。そのような方々とお会いすると、確かな気迫に圧倒されるのだ。「教育」に対する情熱が心に響く。奇しくも今回の外部評価でこの事に又目を開かれ、この事こそが変革の時代にも決して疎かに、

忘れてしまっただけなのだと痛感する事となった。

一方、私達は、教育に関する施設の貧弱さを評価の資料に多く連ねた。ある委員のコメント：「美術館は大学の三点セット（図書館、体育館を併せ）であり、学生の希望も高く、芸術組織として要望されているようであるが、人的資源を食うので余程の覚悟が必要。設置するとしても本学の教育上不可欠であると言えるようなユニークなものに特化したら…。いずれにせよ日々の教育活動に不可欠な施設・設備を充実させる事が先決…。」

私自身は賛同する。洋画・日本画の学生のアトリエは乱立するイーゼルの狭間からモデルを見ている状況だし、照明は暗い。彫塑の学生達は、作品の移動を頻繁に行わないと授業が成り立たない状況である等々。30年が過ぎ教育の環境はもはや他大学に比して自慢できるものではない。

整備する事から出発！何より生き生きと創作ができて芸術教育は成り立つのである。また「教育の成果である作品を学内発表する事。その展示場は早期設置が望まれる。」ともあった。私達は、今回の外部評価に際して、大学会館ギャラリーに於いて教官作品の展示を行った。その評価は展覧会以前のもので、会場の設備、照明等の陳腐さを強烈に批判され、私達は苦笑するしか

なかった。整備すれば良いのである。膨大な経費は必要あるまい。

またある委員の言：「芸術資料室の整理、拡充が望まれる。」現状の資料室は文字通り足の踏み場もない。芸術教育は「見る」事から始まるし、又、大学内に「本物」の芸術作品を多く持つ事、これは非常に大事な事であり、最初に述べた筑波大学の「桐の葉」の精神・伝統にも通じるのだ。

多くの委員の方から、社会との連携・国際交流についてご意見を頂戴した。：「教官学生が一体となって国内外の各地の芸術活動をリードされている点、感服します。東アジア方面以外の国々との交流がいかにも貧弱ですが、わが国の現状ではやむを得ないかもしれません。」

私の属する彫塑教室では、ここ数年外国人留学生の受け入れに消極的であったが、この四月よりミャンマーからの留学生を受け入れる事とした。彫塑芸術は言うまでもなく西洋の教養で出来上がっている。しかし世紀が変わり、さらに一歩踏み込み、日本、そしてアジアの「根源」を考える時代が来ている。画家の委員の方のコメント、可愛らしいイラスト付きの挨拶文の後：「日本の伝統芸術の血脈の上西洋芸術の変遷を平行して認識するのではなく、日本の伝統芸術の血脈の上に西洋芸術の変遷を重ね合わせ検証することが、日本人独自の芸術観

を認識し養い、発展させることになり、それが世界に通用するものを生み出す源泉になるのではないか…。」そしてそのため、やはり「技術力の再認識・再強化が必要と考える。芸術性・観念性に比重を移しすぎたため、実存感の希薄な作品が多く出現しています。私達は自己を含めて絶えず技術を練っておきたいと考えます。」と結ばれた。同感である。芸術の教育は時間がかかるが、その一歩として技術力の再認識とその強化が不可欠である。芸術教育の最重要課題を今問えば、この事を率先して考えなくてはならない。

これから

正月は二日から制作する事にしている。心棒を組み、粘土を付け始める。春の展覧会に備える。非才を嘆きながら、自身に鞭打ち、ひたすら粘土と格闘する。春には美術館で多くの彫刻家の作品の中に自身の作品を置き、外部評価か自己評価か分からないが様々に言われ、又考える。多くの事を感じ取る時でもある。技術かもしれないし、私自身の心の問題かもしれない。いずれにしても生き生きと社会へ向け、私の心を発信したいと思う。この繰り返しを随分続けたが、少々大袈裟に言うと、微細ながら、わが国の文化・芸術の世界に寄与していると思うし、何よりこのような私自身を学生

諸君に見せ続けなくてはと思っている。

作品には真と贋の部分がある。教育にもそれがある。彫塑制作では、できるだけ贋の部分の消し去る事にエネルギーを費やす。贋の部分は実感がなく、真摯に自分自身や外界を質していない。浮ついた表面的な自己満足で終始する。真の部分は、時間の経過を恐れないし無条件に私達の心に奥深く入り込む。芸術の教育は、学生諸君にこの芸術の真の部分を理解してもらう事と思っている。今回の評価を頂いた委員の方々の言をかみ締めながらも、私自身はこの歩みを続けるつもりである。ちなみに先程の画家の委員の方による本学の芸術教育(MC)への評価はBランクであった。

(しばた よしき/彫塑)